

洛友會會報

京都大学電気系専攻内
洛友會
〒615-8510
京都市西京区京都大学桂
075-383-7014
www.rakuyukai.org

京阪電車・開業100周年を迎えて

関西支部長 上田成之助 (昭47年卒)



10数年ぶりに洛友会のお手伝い
をさせていただくことになりました。
支部会員の皆さまのご協力を
いただきながら、開かれた支部運
営を行っていきたくと考えており
ますので、どうぞよろしくお願
いいたします。

早いもので、卒業してから早40
年近く経ちました。電気を動力と
する鉄道ということで、電気系学
科出身であれば何かの仕事があ
ろうと考えて鉄道会社に就職しま
したが、鉄道には送配電から信号装
置、無線電話や電話交換機、通信

京阪グループ各社も大変厳しい経
営環境下であがき苦しんでいる状
況にあります。
京阪電車のこの100年の歴史
を振り返ってみますと、今日の経
営環境の悪化以上の危機は、本
当に数多くありました。しかしなが
ら、それらの危機はことごとく、
先輩諸氏の知恵とたゆまざる努力
によって克服されてきた歴史があ
ります。

例えば、明治43年の開業も、実
はつまずきの中での出発でありま
した。当初開業予定日とした4月
1日は、開業準備の試験中に発生
した守口変電所の変圧器の焼損に
よって絶望的となり、技術陣の昼
夜兼行の修理の結果、何とか4月
15日に開業したものの、朝の9時
には車両故障が発生、その後脱
線事故、更には電車線停電事故ま
で発生して、まさに満身創痍の状
態での開業日となったこともあ
り、開業直後は極端な営業不振に
陥りましたが、様々な営業施策を
講じて、業績の挽回・向上に努め
られたそうです。

その後、度重なる災害の発生
と復旧、繰り返し襲ってくる不況
の波と経営上の危機、それらは総
力を挙げての奮闘努力によって克
服されてまいりました。
その間、技術陣がいくつかの
『日本初』を生み出してきた歴史

がありますので、少し紹介しま
すと、明治43年の開業時には五条
天満橋間の所要時間は100分
であったのを、少しでも早く到達で
きないかと挑戦、90分、85分、80
分と順次短縮していき、大正3年
には『日本初』の急行電車を夜間
最終便として運転、所要時間60分、
特別料金なしということで話題を
呼びました。しかし、十分な信号
保安設備のない状態では、追突す
る恐れのないほどの時間間隔をあ
けた深夜の最終便でしか運転でき
ず、お客さまのご要望にお応えす
ることができません。そこで大き
な投資とはなりますが、『日本初』
の「色灯三位式自動閉そく信号機」
を導入、この設置により昼間時間
帯でも安全な急行運転を可能にし
ました。

と大規模な投資も行ってきました
た。現時点における最後の仕上げ
が、これまで鉄道の空白地帯であ
りました大阪の中之島地区を東西
に貫く中之島線の建設でありまし
た。

平成20年10月19日午前5時12
分。「万歳！」の大きな声と拍手
喝采の中、一番列車が発発したあ
の日からまもなく2年が経とうと
しています。開業前の準備段階は
もちろんのこと、開業後も関係者
のご尽力により、中之島の風景が
確実に変貌を遂げてきています。

「水の上の新都心へ」をキャッ
チフレーズに開業した中之島
線。この言葉の通り、中之島が
水都大阪の象徴になりつつあり
ます。「OSAKA光のルネサ
ンス」、ビーチバレー、「水都大阪
2010」。これまで人の流れが
少なかったところへ人が集い、土
曜・休日には家族連れやカップル、
老夫婦など幅広い層の人々の姿が
オフィス街でも見られるようにな
りました。水辺に人々が集まり、
ゆったりとした時間を楽しむ様子
は、まさに水都の風景そのもので
す。そして、これらの人々の流れ
を中之島線が担っているんだとい
うことを実感するとき、鉄道は、
単なる輸送手段としての役割だけ
でなく、文化を創出するというも
う一つの役割をも担っていること

サービス面におきましても、常
にお客さまの求めるものを感じ性
豊かに受け止めて、開発、実
現してきました。昭和2年には『日
本初』の全鋼製ロマンスカーを登
場させて、ロマンスシートでの旅
の楽しさをご提供した他、昭和29
年にはテレビカーを登場させて人
気を博しました。

第二次世界大戦期の阪神急行電
鉄との合併と分離を経て、高度成
長期になりましたからは、淀屋橋
延長線の開業、天満橋駅から萱島
駅に至る高架複々線、鴨東線開業

を再認識するのです。

そして開業からちょうど1年を迎えた昨春秋、中之島線に関するうれしいニュースが舞い込んできました。「中之島線の4駅」と中之島線開業に合わせて新造した「3000系車両」がそれぞれ別部門で「グッドデザイン賞」を受賞。また、時を同じくして、なにわ橋駅の交流施設「アートエリアB1」における社会学・地域連携文化活動が「メセナアワード2009」『文化庁長官賞』を受賞することになりました。「3000系車両」は先に発表された鉄道友の会の「ローレル賞」とのダブル受賞となりました。

沿線という地域なしでは、鉄道事業は成り立ちませんし、お客さまの生活に密着した当社のグループ全体の事業も成り立ちません。今回の受賞は、「中之島」という地域をどう活性化していくのか、京阪電車はどう臨んでいくのか、というテーマで対話したその姿勢をまずは評価されたものだと思いますが、結果はこれから導き出していかなければなりません。開業100周年を迎えた今、次なる100年に向けて決意を新たにする次第です。

名誉教授だより



時流に流されず

本質を見失わず

—— I N の摩訶不思議 ——

池上 文夫

(昭22年卒 京都大学名誉教授)

はじめに

久しくご無沙汰していましたが、木村磐根先生から洛友会報に若者へ一文の依頼を頂き「今時の若者」ならぬ「今時の通信」が頭に浮かびました。新情報通信 Internet (I N と略記) の輝かしい成果に踊る人々と裏腹に、I N の理解を超える摩訶不思議な現象に世界は殆ど目を塞いでいます。今時の通信では「アプリ(応用)」の奔流に乗じて稼ぐ人々が注目され、背後にある「通信の本質」を見失う風潮が若者の「技術離れ」を助長していると思われまます。京の街は千年の昔から時流に流されず、本質を見失わない伝統を築いてきました。京都大学はその流れを汲み、洛友会もその心を受

け継いでいます。時流に流される今の世代よりも、技術の本質を求め「今時の若者」に期待します。これは、情報や通信網が専門とは言えない一人の年寄りの、I T の将来に対する余計な心配です。

両網を分析すると背反性が明瞭で、旧網は守秘性が高く、新網は本来、公開情報に適する。従って守秘性も要求する公共用通信網に I P 網を使うのは理に逆らう、との素人の素朴な疑問を感じたのが、今から6年前前であった。

2. I N の基本的欠陥

I N の発展と共にウイルス、迷惑メール、情報の漏洩・詐取、悪意の妨害・攻撃など各種のトラブルが次々に発生した。その対策を講じても敵は更に新手を考えるので「もぐら叩き」の繰返しとなる。企業などに対する妨害は重大で各種の対策があるようだが、詳細な内容は企業秘密とも聞く。各国の重要機関への攻撃も報じられるが、実態は全く発表されない。

本来、I N の本質的リスクは一般ユーザに十分説明し被害は自己責任と強く警告すべきだが、そんな公式表明は何故か全く無い。専門家も「この程度の被害は新技術には付き物で、誰もが安くて便利と喜んで使っているからいいではないか」と呑気なようだ。世の中 I N への疑念は殆ど見えず、各国政府も将来の通信網には完全 I P 化を目標と考えている。

秘密漏洩やサイバー攻撃の経済的被害は \$ 1 0 0 0 b n (邦 貨 約 1 0 0 兆 円) に 達 し、 安 全 保 障 に も 重 大 な 影 響 が あ る と 発 表、 と 外 紙 記 事 で 知 っ た。(※) 大統領の発言以来、I N の報道も具体化したようだ。I N の安全対策には少なくとも数億ドル(邦貨数百億円)を要する、との米企業幹部の話もあつた。(※) これらの記事に元氣付けられて I N への疑問は本物と感じ、更に素人の考察を進めた。法律の規制を好まぬ I N の自由・公平の哲学の矛盾が I N を性善説の無法社会と化した。これは倫理問題でなく、解決は明らかに技術と技術者の責任と考えたからである。

3. Best Effort型契約

契約は「Guarantee(保証)」する(約束は守る)ものと考えていたが、「Best Effort(最大の努力)」型(BE型と略記)契約の存在を初めて知ったのが I N であつた。契約の実現に最大の努力をすれば、実現できなくとも損害賠償義務は無いとの契約形式という。自社の欠陥商品をリコールして大企業が危機に陥る例を多数見る今の社会で、BE型の契約が存在し得るのかと強い疑問を感じたが、現実には I N は安全性も品質も保証しないBE型の典型らしい。

I P 網のバケット交換系は、異なる各種情報バケット群を時分割伝送し伝送効率が高く、各種デジタル情報形式に対する柔軟性に富み、交換機能は単純で安価など、多くの優れた特長をもつ。

通信網の将来は心配だが年寄りには為す術も無く「これが単なる杞憂なら良いが」と思っていた。昨年5月、オバマ米大統領が我々庶民は少数の保証型(G型)

契約の経験はあるが、BE型には全く経験の記憶も無い。日常生活で物品の売買や交通機関の利用などに一々契約はしない。恐らくこれらは売り手・買い手の間に十分な信頼関係があるからであろう。法理論には疎いが、日常の売買などは相互信頼に基づく「無意識のG型」契約とも呼べよう。

他方「BE型」契約は、契約者間に相当強い信頼関係がある時に限られるだろう。しかしIN契約者間には日常的以上の深い信頼関係は無い。INは何故「BE型」を用いたのか？を考えた結果、次の解答に到達した。

それは、INには通信の特性や品質を決定する基礎理論が無いからで、その原因はパケット交換にあるらしい、ということである。

パケット交換は蓄積交換の一種で、送信点からのパケット群は状況により様々な経路で受信点に到達し、遅延時間を補正して情報を再現する。その過程で符号誤りやパケットの消失も起こり得るが、パケット群の経路が不定で、受信特性などの基礎理論の欠如により保証できる対象が無く、現状では「BE型」契約形式の選択以外には無かったであろう。

4. もう一つの問題点

基礎理論の無いINが通信品質(Quality) や信頼性(Reliability)

を保証せず、更に安全性(Security)を含めた通信網のQRSを保証しないことは、国の重要なインフラの資格を疑わせると考える。

近代技術は数学・物理学の基礎学問の上に作られた。情報学は主に論理学に基づくヴァーチユアルな世界を創ったが、その通信システムの動作が物理学の論理で記述できなければ、現実世界でも普遍

の特性は記述できないであろう。INが、そのシステムの性質や特性を普遍的に記述できない理由は、この点によるとも考えられる。

例えば通信網を創るには、通信の目的・品質などの目標を設定し、伝送路・交換機の所要特性など、システムの仕様を決める。しかし、基礎理論が無いINは自分でシステムの合理的設計ができない。

では何故INが存在するのか？それは昔からの電話網施設をそのまま借用したからで、INに最適な網構成は設計できない。

国内INの通信量は半導体集積度のムーアの法則(2倍/18ヶ月)に近い速度で増え、このままでは10数年で通信量は千倍に達する。INは、これに対する将来の対策を立てる理論の筋道すら無い。

つまり「BE型」のINは設計・改良・将来対策も論理的にできず、凡そ原始的なシステムとでも言われるを得ない。工学的技術とは呼

べない摩訶不思議な技術である。

5. コストと料金制度
INの実用の姿の中にも不思議がある。例えばINは今なお定額料金制であるが、本来は通信の情報量・速度・距離に依存するコストに基づく従量制が原則である。

IN商用の初期に「INの伝送コストは無視できる」との神話があった。回線交換網の置き土産の光ファイバ網のコストは無視でき、ルータは機能単純、定額制の低料金でペイできた。これは5G帯域の時代のお話。今は4G帯域を超えるstreamingの映像の時代、嘗ての神話は消えつつある。

YouTubeやGByteの映像が飛び回り、日本では昨年来ISP(プロバイダ)は異常な大量情報発信のユーザの規制を開始した。光の普及が遅い欧米でも、今年FDDやiPhone 4の出現で通信企業は広帯域網の投資が必要と騒ぎ(※)、更に広帯域情報の急増でグレーの「タダ乗り」を非難し、定額料の不足を補う特別料金を支払えと求める報道もある。(※)

INは自律分散の自由・公平にも拘らず、定額料金制はKByteとGByteの情報量が同料金、隣家へと地球の裏側への通信も同料金で実に百万倍の「不公平」である。更にメールの90%は迷惑メールで、定額制こそは有害情報の跳梁

跋扈を産む元凶でもある。

合理的な従量料金制の採用にはQRSの正確なコスト勘定が必須で、論理無きINには難しい。

6. 責任の分担構造

QRSに対する責任の分担にも不思議がある。「BE型」INでは端末諸装置・IN利用料・各種妨害対策は元より、損害も「素人」のユーザの自己責任である。

他方、通信会社・ISPの高度な「専門家」集団は殆ど無責任でシステムの改良・改革の動機付けが無く、運営上極めて非効率・非合理的責任分担構造である。

實用化以来20年超。INの本質に進歩が殆ど無いのはそのせい。自律分散の名目で技術の進歩を妨げる責任分担を採用した。

7. 摩訶不思議の総括

INの摩訶不思議の原因は全て基礎理論の欠如と非論理的構造で、この「学問無き技術」は技術者が取扱う範疇外とさえ感じる。

そのようなINが何故生まれたのか？ ARPANetの閉じた網が公開のINに移る頃、技術者の判断に誤りがあったと想像する。

当時は大学・研究所の研究者が運用し悪人は不在、通信量も少なく輻輳障害も無かったであろう。通信の実験結果が不足の関係者は、ARPAの良好な実験結果から實用可能と速断したと推測される。

研究から實用化への決断には広汎綿密な検討が必須だが、非通信の専門家には無理であった。

当時AT&Tは独禁法でFCCにデータ通信の研究を禁止された。このテーマから除外されていた。ベル研究所(研究實用化の哲学の産みの親)の協力があれば、INは全く違う姿になったであろうと、今更ながら非常に残念に思う。

これまで新技術は学問の裏付けと共に発展してきたが、学問無きINはその後「アプリ」のみに走り現在の混沌に導いた。その行先にはINの破綻が垣間見える。

技術はこれから何を為すべきか。一つはINの「BE」を解消するパケット交換網の基礎理論の研究。決して易しくはないが。せめて計算機シミュレーション？人類は今、超規模の実物で壮大な実験中。このデータを活用しない手は無い。

二つには全く新概念の最終網の開発。各国の次(新)世代ネットワークNGN(NWGN)の研究はまだ見通し不十分のようだ。

終わりに

若し、この年寄りの意見を訊ねられれば、次の答えでしようか。守秘情報と公開情報を統一網で扱うのは疑問があります。新・旧両網は全く背反的で夫々は原理的に50点しか取れない。独立な別網

ならば夫々百点満点が可能です。
公開網は現在のオープンIP網
でも結構。守秘網は回線交換網(光
交換も考慮)か、閉IP網を使い
ます。コストは掛るが、もぐら叩
きではなくて、本質的な安全確保
の対策です。但し、閉IP網は完
全な物理的隔離が必要です。

これを当面の世界統一方式と
し、今世紀中頃の革新的方式の完
成を待つことにしましょうか。

「学問ある技術」を目指すには基
礎からの長い積み上げが必要です。
「学問有るIN」を創り、十九世紀か
ら築き上げた通信工学に結びつけ
るのが今世紀の仕事でしょう。

素人の年寄りが「今時の若者」
に未来を託す所以はここにありま
す。

【謝辞】

(※)印は岩増弘三氏(昭28年卒)
提供のフィナンシャル・タイムズ
紙の情報です。同氏による不断の
ご協力に深く感謝致します。



会員寄稿

卯本研の思い出と

越後よもやま話忒題

岡田 清

(昭46年卒・東北支部)

卯本重郎先生への感謝の念と、
新潟県のPR二題です。
卯本研の思い出

上越新幹線が開業して以来、関
東圏が時間的に近くなり、京都に
も足が遠のいていました。しかし
今年4月10日に、卯本重郎先生が
瑞宝中綬章を受章されたことを
祝賀会が京大大会館で開催さ
れましたので、何をさておいても
と思いで出席させて頂きました。研
究室でご指導を頂いた我々は年齢
相応に外貌が変わってしまってお
りますが、卯本先生の温顔は学生
時代に印象付けられたお顔とまっ
たくお変わりなく、とても喜ばし
いことでした。

特別研究では電力回路網の進行
波をテーマに、当時助手をしてお
られた原武久先生と院生でおられ
た福森孝司さんに直接のご指導を
させて頂きました。その審査の折に、
上之園親佐先生から架空地線のこ
とで質問があり、不勉強であった
私は立ち往生をしてしまいました
た。そのとき卯本先生が助け船を

出して下さり、上之園先生がよう
やく鉢を納めて下さったことを、
その折の冷や汗とともに今でも思
い出します。

卒業後は長岡高専に勤め、かた
わら、博士の学位と技術士の称号
を取得することができました。小
さな研究でしたがそれなりに山や
谷がありました。それにもかかわ
らずあきらめないで研究に取り組
めましたのは、卯本先生から賜り
ました温かいご指導の御蔭と、心
から感謝いたしております。

昭和46年3月の卒業後もなく
卯本研OB会の名称の公募があ
り、「タレース会」と応募いたし
ました。卯本先生は思索に集中さ
れると周りの状況が気にならな
くなり、その結果、躓いて転ばれ
たり溝に落ちて怪我をされたりと大
変危ない方なのです。これは、少
年の頃に読んだ、最初の哲学者と
言われるタレースの逸話そのもの
であると思いました。そこで、タ
レース会と応募した次第でした。

幸い、音を採用して頂き、「他励
寿会」と、より卯本研OB会にふ
さわしい名前にして頂き現在に
至っています。

この他励寿会の名称のことと、
平成6年に卯本先生が退官された
折に先生から頂きました「血液型
相関図」、そして、この度賜りま
した「印鑑ケース」は、私の3種

の神器ともいえるものになってお
ります。

(越後よもやま話その意) 啄木鳥
(キツキ) 戦法と真珠湾攻撃

長岡藩牧野家17代当主の牧野忠
昌氏のお話によれば、「長岡藩の
家老次座連綿の山本帯刀家は山本
勘助の兄弟の家系である」という
ことです。系図は種々あるよう
ですが、山本家は、牧野家が三河・
牛久保に在城当時、今川家から派
遣された七家のうちの一家であつ
たといえますし、その当主が代々
勘右衛門を名乗っていることや
(勘助の勘と同じ)、山本勘助が当
初、今川家への被官を望んだとい
う伝承があることなどから(牧野
家で陪臣を務めるより、今川家の
直臣であるほうが格上になる)、
間違いないことなのでしょう。

山本といえば、現在の長岡市で
は何ととっても山本五十六氏で
す。しかし、五十六氏が件の山本
帯刀家の後裔であることを知る人
は長岡市民でも少ないようです。
戊辰戦争の折、当時の山本帯刀家
の当主は捕らえられて斬首され、
その後、長岡藩の罪を背負って家
名断絶の憂き目に遭いましたの
で、それやむを得ないことなの
かも知れません。五十六氏は名家
である山本帯刀家を再興すべく、
他家から養子に入った人です。

山本勘助は、川中島の合戦で武

田信玄に啄木鳥戦法を進言しまし
た。一方、山本五十六は真珠湾攻
撃の指揮を執りました。軍師の
DNAが、どこかで繋がっている
ものなのでしょうが?

(越後よもやま話その忒) 夏目漱
石と良寛の書

夏目漱石は生来胃弱であつたよ
うで、結局、それが命取りになり
ました。

森成麟造医師は上越市安塚区真
萩平の旧家の出身(明治17年生ま
れ)ですが、東北大学医学部の前
身を卒業後、一時、東京都千代田
区内幸町にあつた長与胃腸病院に
勤務していました。漱石と森成医
師との出会いは、漱石がこの病院
に入院(明治43年)したことに始
まります。更に、いわゆる漱石の
「修善寺の大患」(明治43年)の折
に森成医師が漱石に付き添ったこ
とから、終生、二人は親しく交流
することになります。

漱石はこの折、修善寺で本当に
死にかけたようです。森成医師
が、もう一人の医師とドイツ語で
「大丈夫だろうか?子供さんに逢
わせた方が良くはないか?」と会
話していたら、漱石が突然目を開
き、「私はまだ死にませんよ」と
言って、また目を閉じたなどとい
う、笑うに笑えない話が残ってい
ます。

森成医師はその後もなく(明

治44年) 帰郷し、上越市本町2丁目に医院を開きますが、漱石との親交は変わらずに続きました。漱石が夫妻で森成医院に泊まり、翌日に高田高校で講演、同日、わくら楼、越後国分寺を見て再び森成医院に泊まる、などということもありました。漱石の作品に出てくる越後の粟飴、笹飴などを漱石に教えたのは、この森成医師です。

漱石は晩年、良寛を「則天去私」の具現者とみて、その境地を理想とするようになります。彼は大正5年の秋に他界するのですが、その直前の同年春に念願の良寛の書・2点を手に入れています。これは、森成医師の斡旋によるものなのです。漱石によれば、良寛の書は「(字が)うまい、のではなく、(字の位が)高い」のだそうです。この良寛の書は、秋には婦らぬ人となる漱石への、何よりのプレゼントトだったのではないのでしょうか？

豪にいれば豪にしたがえ

高橋 昭彦

(昭58年卒・中国支部)

オーストラリア第二の都市メルボルンに赴任してきて早二年、豪にいれば豪にしたがえ、とばかりになんできたので、気がつかなくなる前にこの国のユニークなところを紹介できればと思います。これまで観光地として有名なエアーズロックやグレートバリアリーフなど旅行には何箇所か行きましたが、この大きな国全体からみたらほんの一部分。そんな中でオーストラリアを語ろうとしているのはいささか無謀な気がします。そこはご容赦ください。

オーストラリアでまず思いつのは、カンガルー・コアラ・カモのはしといった動物達。カンガルーはちよつと郊外のゴルフ場に行くと普通にびよんびよん跳ねていて、人が打っていると、小馬鹿にしたような顔でみています。原色のきれいなオーム類も熱帯さながらに飛びまわっているのも不思議な感じがします。

でも、赴任してきてまず驚いたのは、アジア人の多いこと。白人の国のようにイメージしていましたが、いろんな人種の人々で街は溢れていました。元々、流刑地としてイギリスからの移民が始まったことは有名ですが、1980年代からは世界中から移民を受け入れる政策をとったこともあり、今では約20%が移民で占められています。というところで、国民性といっても外国人を含めたものになるわけですが、とても明るくて活動的です。口癖はNo worries。

直訳すれば「心配ないよ」というような意味ですが、ありがたうのお返しに、ごめんなさいのお返しに、何か問題が起きてても、心配はいらぬという感じで使われています。みんなおしゃべり好きで、道端に並べられたレストランのテーブルや、夜はパブに集まったりは大笑いしながら語り合う姿で賑わっています。

ユニークなスポーツも数々あります。中でもラグビーとサッカーとバレーボールと格闘技が合わさったようなオーストラリアンフットボールは地域をあげて盛り上がっています。メルボルンを中心としたリーグ戦が行われていますが、近郊の街にそれぞれのチームがあって、地域の人たちが熱狂的にサポートしています。子ども達も学校の体育や遊びでよくやっています。新聞一面は毎日選手の活躍やスキャンダルの話題で飾られるわけです。

世の中には不景気風が吹いていますが、そんなことはどこ吹く風とばかりに皆さん楽しそうに生活しているところは羨ましくもあり、不思議でもありません。日本の停滞した感じとは裏腹になぜか盛り上がっている、そんな感じのオーストラリアです。それは、どうも国土が広いとか、天然資源

が豊富なこととかとは直接関係がないような気がします。

考えを進めていくと、お金の流れの違いではないか、ということころに行き当たります。物価は全般的に高いのですが、特に人手がかかっているものは高いように思えます。聞いてみたら最低賃金はアルバイトでも15ドル(約1200円)、それも失業保険つき。日本ではいくらだったでしょうか？

日本ではスマイル0円とか、よいサービスはただで当たり前という雰囲気がありますが、それはここでは常識ではありません。日本では、いい品質のものを安く届けることが絶対のように企業活動行われていますが、一生懸命作り込んだ品質をただ同然で提供するのには誰のためなのか、よく考えなおす必要がありますね。ここには超安売りをしている店は見当たりません。良い品質のものにはしっかりと対価を払う。それで得たお金を使ってよいサービスを受ける。お金が回る日本、ちょうどいいくらいのバブル復活が待たれます。先述したスポーツの盛り上がりも大切なことですね。私の出身地広島にはプロ野球もJリーグもチームがあります。こちらのフットボール並に盛り上がりれば景気に大きな影響が出てくることは間違いありません。

こんなメルボルンで日本と比べて安いのは何といってもゴルフ。日本のようにサービス・手入れば良くありませんが、30ドル程度で回れるコースが近くにたくさんあるのがうれしい。もうしばらくゴルフ三昧の生活を続けながら、オーストラリアを満喫しつつ、外から日本を見つめていきたいと思っています。



現役をつづけること

門田 浩

(昭46年卒・東京支部)

大学の同窓会報への寄稿となると、その記事内容は、悠々自適を含め、いかにセカンドライフを楽しんでいるのか等の読み物を期待されているのではないだろうか。残念だが、私は皆様のご期待を裏切ってしまう。いまだにあくせく働いている。毎朝、行つてきます、と女房に別れを告げ、たまには深夜にタクシーで帰宅する様子を毎日送っている。なぜだろうか。義務教育化している高校教育課

程をまだ終えていない息子は、家庭経済の観点からいえば不良資産である。回収の見込みが不透明なのに、せつせつせつと追加の投資をする、これは親でなくてはできない愛情的愚行なのだろう。結果としてのCF悪化は言うまでもない。そればかりか、やれ部活応援、三者面談などと、休日も担ぎだされる始末。夫婦そろっての旅行動夢のまた夢なのである。

しかし、副次的効果は意外と良好である。いわば工場はフル稼働、貧乏暇なし、そしてなによりも亭主は元気で留守なのである。不良資産の健全化という使命感は愚行というより遺伝子を残し続けたいという本能に従う行動、それゆえ不思議な快感が伴うものである。さらに下司な視点では、息子の同級生の両親は少なくともひと世代若い。先生もしかり、保育園、幼稚園。お母さん方も、である。大学の先生が意外に若々しいというのは研究に頭脳を使い、常に好奇心に満ちた脳活動をしているばかりでなく、環境として常に学生という若年層と付き合うからだと思う。年寄りばかりの中で芝生を徘徊するのはいかがなものか、などといった眉をひそめてしまうのは貧乏人のやつかみか。おっと話がそれてしまったが、私はひと世代遅れの環境で、元気に働いてい

るし、働かざるを得ないのである。

こんな還暦すでに通過族がいまだに現役面をして働けるドメインとはなにかであろうか。それは古くからの課題を抱え、なお解決の道りのりが遠い世界である。皆様は「組込みシステム」とあるいは「組込みソフトウェア」という言葉をご存じだろうか。綴じ込みや折り込みではない、組込みである。電子機器に「組込まれた、あるいは内蔵された」ソフトウェアである。そう、マイクロコンピュータの出現で電子計算機システムが様々な機器に内在するようになった、その電子頭脳の「脳みそ」部分である。昔はメモリも高価、マイコンは低性能で、たいした仕事はできなかったわけだが、半導体技術、すなわち数ミリ角にも満たないシリコン破片の上に、数千個も演算素子を詰め込んだうえに、電池駆動にもかかわらず高速動作させる技術、のおかげで、飛躍的に脳味噌の量を増やしその知能の拡大を可能にした。電子機器産業の期待の星かもしれない。だがしかし、何事にも落とし穴はある。

脳味噌の実態はソフトウェア、要は計算機のプログラムである。さすがに計算機の資源を直接操作する原始的なプログラム言語を用いることは非常に少なくなり、高級言語と称するプログラム言語を

用いるようになったおかげで、表現はだいぶんと楽になった。しかし、応用製品がより多機能、高性能をめざし、あれもこれもと一見手軽なソフトウェアで実現することが主流となった。ところが、である。ソフトウェアをいかにして作成するか。これがこの時代に、「人手」である。何を実現しなさいという設計書、それは、それなりに工夫されているのだが、結局技術者が意味を読み取り、彼の頭の中で処理手順を設計し、それを電子メディア上のプログラムとして表現する。これでヒューマンエラーが出ないわけがない。出るのである。また、作業効率を極めて悪いことが容易に想像されよう。

しかも組込みでは頼りにすべき計算機は様々なクセがあるマイコン、そして応用分野は通信、工業制御、家電、ゲーム、自動車制御など多様であり問題に輪をかけて。さらに最近では社会インフラにも影響しており事の重大さがお分かりになるだろう。

このような世界に入るきっかけは、はるか昔に日本電気に入社し、半導体部門に配属された時にさかのぼる。日本電気の半導体ビジネスは1988年、89年と売上世界一となったことのあるのだが皆様の記憶に残っているだろうか。ここがマイコンとの接点を作った。

しかし、マイコン設計技術者としてでは落第で、ソフトウェアに浮気した。それが後々幸いして、2003年に経産省から「組込みソフトウェアを強化する組織を作るから参加しなさい」といわれ、翌年、(独)情報処理推進機構(IPEA)の中に「ソフトウェアエンジニアリングセンター(SEC)」なるものが創設され、そのメンバーとなった。ちなみにIPEAは独立行政法人である。昨今の事業仕訳には当然さらされているが、半導体を続けていれば今頃はリストラの憂き目にあっていたことだろう。余談であるが、独立行政評価委員会IPEA分科会の委員長は本学の松山隆司先生である。先生は昨今IPEA、とくにSECには厳しいのだが、攻守ところをかえてSECの所長はと言うと、またまた本学の先輩、松田晃一氏である。まあ不思議な御縁である。

さて、皆様のご明察のとおり、この問題は「組込み」に限らずソフトウェア開発全般の問題であり、ソフトウェア工学の専門家であり、ソフトウェア取り組んでいた。ただし、組込みは穴であった。気が付けばソフトウェアが増殖し、現場には専門家がいない。組込み固有の特性が問題をさらに複雑にしている。最近では安心、安全も加ってはいるが、なすべきはソ

フトウェア工学の適用による品質改善、効率改善である。基本的にこれらは果てしない仕事である。それぞれの基準は時代と場所で変化し、しかもPDCAサイクルが回るたびにハードルが高くなる。オープンエンドな戦場である。つまり我が脳味噌がついて行ける限り仕事はなくなるならない。

と、ここで終わりそうなお話であったが、少し尾ひれがつく。今年3月末にSECの現場を退き、別の業界団体に母屋を移してしまった。理由の一つは足かけ7年もSECで同じポジションに居たこと(きつとあるに違いない)弊害を断ち切ること、それと7年の成果を業界の現場で試したいと思ったからである。その業界団体の名前も「社団法人組込みシステム技術協会」、名が体を表しているかは少々疑問符がつくが、飽きがこなければしばらくここを根城に不良資産の健全化と、組込みで現役を続けることにしたい。

朝の新聞習慣

高木 志穂

(平18年卒)

社会人になって、ようやく新聞を読むようになりました。といっても、毎朝郵便受けに配達される

紙の新聞ではなく、iPhone / iPod touchで読む電子版の新聞(産経新聞 iPhone版)を読んでいます。皆様の中にも、ご利用になっている方がおられるのではないのでしょうか。

朝起きたらコーヒーを淹れ、出上がり待つ間に産経新聞のアプリケーションを起動して、用意した朝食をとりながらダウンロードした紙面を読む、というのが私の習慣になっています。まず一面の見出しをざっと見て、次に生活面、経済面の記事を読んだあたりで朝食終了。家を出て電車に乗ってから、また一面に戻って気になった記事から順番に読み、一通りその日の紙面を読み終わった頃に会社に到着。このスタイルにしてから、新聞を読むという行為が非常に楽になりました。今では iPod touch本体も、このアプリケーションも手放せないツールになっています。

ただ最初からこんなに気軽に新聞を読んでいたわけではなく、ほんの一年半前までは紙の新聞を相手に、毎日悪戦苦闘していました。当時は日経新聞を購読していたのですが、朝起きて新聞を読もうかと思っても、まず取りに行くのが億劫で挫折していました。面倒くさがりだと思われるかもしれませんが、一階の集合ポストに配達

された新聞を取りに下りて、また自分の部屋に戻って、それから新聞を広げる、という一連の作業が、朝の忙しい時間帯に行うにはハードルが高かったのです。

『同じマンションの住人にばったり会うかもしれないから、新聞を取りに行くだけとはいえ身なりはちゃんと整えた状態でないといけない。けれどそこまで身支度できた状態なら、部屋に戻るよりそのまま出勤してしまいたい。時間も勿体無いし、出掛けにバッグに放り込んでそのまま電車の中で読むのはどうだろうか?でも、混雑した車内で新聞を広げるのは周りの人に迷惑がかかるし、気を遣ってしまふ。帰宅してから読んでみようか。いや、仕事で疲れた状態で、情報の鮮度が落ちた新聞をわざわざ読む気にはなれないし。』

おおよそそのような考えが頭の中を巡って、結局三ヶ月も経たないうちに、二日に一回はまともな目を通さず紙ゴミ行き、という状態になってしまいました。そのうち、回収日まで新聞を溜めておくのも邪魔と感じるようになり、『月四千円も払って嫌な気分になるのなら新聞なんて必要ない。情報の入手はインターネットで十分。』と結論つけて、新聞の購読はわずか半年で止めてしまいました。その後は、インターネットの

ニュースサイトで欲しい情報だけ取る、という学生時代と同じ方法で済ませていたが、一時的でも新聞を定期購読したあとだとインターネットでの情報に物足りなさを感じるようになりました。

ニュースサイトを開いてもリードがずらりと並んでいるだけで、どれが重要な情報か全く分からないのです。結果押さえておくべき情報よりも自分の興味のある記事だけ読むようになり、その興味のある記事も載っているのは途中まで、という事が続く、やはり新聞の紙面で記事を読みたいという欲求が起きてきます。とはいえ、根本的な問題が何も解決していない状態で新聞の購読を再開しても、またすぐ新聞紙を邪魔者扱いするのは容易に想像がついたので、仕方が無いと半ば諦めていました。

そんな時に iPod touch を譲り受けて、とりあえず真っ先にインストールしたのが産経新聞の iPhoneアプリでした。アプリケーション自体も、毎日の朝刊データのダウンロードも無料。なによりも部屋を出ることなく新聞が手に入り、片手で操作でき、かさばらず、ゴミ出しをする必要もない。新聞から、新聞紙であるというハード面のデメリットを除くとここまで読みやすく便利

になるものと感動すら覚えしました。また、気になった記事は画像としてスクラップできるなど、ハードの良い所も幾分かは残されているような気がします。

この iPhone版の電子新聞のおかげで毎朝新聞を読むというのが楽しく続けられるようになりましたが、今のところこの『新聞をデジタルで、新聞らしく読める』サービスは産経新聞だけで、他の新聞社では提供してないようです。個人的には、記事の特微から日経新聞の電子版も読みたいとは考えているのですが、4千円という新聞と変わらない値段と iPhone / iPod touchでは紙面ビューアが使えないという点から今はまだ様子見です。いつか有料で構わないので(ただし適正な価格で)、産経新聞と同じようなアプリケーションが出てくるのを待ちわびています。無い物ねだりの日々はしばらく続きそうです。



音楽大学に

「IT」と「経営学」を

導入する挑戦

―創設される新学科

「音楽マネジメント学科」

について

安井 敏雄

(昭和41年生)



筆者は相愛大学音楽学部(大阪)に「音楽マネジメント学科」を創設すべく「設置準備室長」の任にあつて約2年。その基本構想から実施内容迄つくる機会に恵まれ来年4月に開講されることになった。この新学科の紹介をさせて頂くことにする。

***「新学科の目指すもの」**

音楽大学といえはバイオリンやピアノなどの器楽演奏や作曲などを教え学ぶところとイメージされる。相愛大学は創立されて百二十二年を迎えるが創立以来音

楽教育を重視し初代音楽学部長に山田耕柝氏を迎え多くの優秀な演奏家を輩出してきた。創設期の15年間、小澤征爾を育てた斉藤秀雄氏から育成指導 薫陶を受けた「相愛オーケストラ」は伝統的に評価も高い。今回この伝統ある音楽学部を設置される新学科は演奏家の育成を目的とするのでなく音楽をビジネスとしてとらえ「音楽」を愛し学ぶものが併せて「IT」と「経営学」の専門スキルを習得することとでその幅広いニーズに応えより充実した職業の選択を与えようとするものである。

インターネットによる「音楽配信」や「動画の共有」に代表されるように音楽を取り巻く環境もコンテンツビジネスの成長を中心に「IT」の革新とともに激しく変化している。

また近年脚光を浴び始めた「アートマネジメント」の分野ではコンサートやイベント企画を始めDVDや音楽出版、放送番組などの企画・制作、ホールの運営、地域との交流、各種文化事業の推進などアーティストや聴衆が望むより特色ある企画や上質の企画が求められてきている。ときにはその規模や複雑さも増し国境を超えたグローバルな企画も多く「IT」や「経営学」の知識・手法の更なる導入も待たれている。

新学科では学生は楽器演奏・合奏技術、作曲・編曲といった音楽の基本を学び芸術への造詣を深めつつコンピュータやインターネット、携帯電話などの基本と応用、プログラミングも基本からWEBデザイン、CG、ゲーム・マンガ・アニメまで学べ、音響学・録音技術などのステージ技術も新しく用意されたスタジオとホールの新校舎で学ぶ。

経営管理学ではキャリア・デザイン、リーダーシップ論から事業計画の作成、プロジェクト管理、財務諸表の読み方や著作権などを学ぶこととなる。これらを駆使してコンサート企画のプロデュースやそのスタッフ、DVDや音楽出版の企画・制作員、放送やインターネット通信での番組企画・配信、アーティストの支援事業も含めた多様なビジネス分野で活躍する者を輩出させたいと思っている。

一学年50名の学生に専任9名、非常勤講師70名という教員の陣容で、私自身多くの候補の方々を面談し教育に熱心な実務経験者も含め素晴らしい方々に来て頂けることになった。学生には充実したメインターとカウンセリング制度で入学から卒業・就職まできめ細かく指導し基礎学力とともに豊富なゼミ・研究プロジェクト、産業界とのパートナー連携やインターン

シップを中心に学んでもらう。グローバルな人材を育て、かつ大阪が世界に誇る上方文化を発信させようと欲張っている。

*「背景」きっかけと動機

私自身は電子工学を学びコンピュータ・サイエンスでPhDを取得、その後IBMやハイテク・グローバル企業で日本や海外で技術やビジネス開発に携わりその後通信ベンチャーの経営幹部など経験してきたが「音楽」と「教育」という分野は初めてである。小学校の頃バイオリンを習い始め洛星高校時代にオーケストラ部の創設に係り京都大学で交響楽団のヴィオラ首席奏者やコンサート公演のジュネラル・マネージャーを経験し情熱を注いだ。その後楽器を手にすることもなくそろそろヴィオラのレッスンをとっていたらいつの間にか家内と一緒に春と秋に若手女流ヴァイオリニストのサロンコンサートを始め、また夏には長野県蓼科でプロとアマによる4泊の音楽合宿とコンサートを主宰するようになっていた。音楽の好きな人たちの繋がりのおかげで、豊かさを感じつつ感動をつくる喜びを再び経験している。そしてこれらの活動を通じて演奏家や音大生が何を望み、何に悩み、自立するの何が問題なのかなどいろいろ学ぶ機会にもなった。実はこれが新

学科の構想を発想させた私の原点であった。一方学生やベンチャーにも関心があり法政大学に経営管理の専門職大学院が設立された当初から客員教授として「IT」と「経営学」が導入されて成功している学科も見えてきた。こうして「音楽」が好きで音楽に携わる職業につきたいと願う者に「IT」と「経営学」を導入し自立できる助けができたらと極めて自然に発想した。

本学園の理事長や学長、学部長、教授の方々に自分の考えていることと聞いて頂く機会がありすでに「学園の改革」で描かれていた構想にも合致した経緯から招聘された。企業人間それも英語の仕事の多かった私も早速なれない文科省への申請書類づくりやカリキュラム、シラバスなど書き方を習いつつ自分自身でかなり手も入れ作業してきた。学園も新学科の2年目には相愛学園発祥の地、御堂筋本町に新学科の校舎を新築することを決め工事も着手される力のいれようである。

*「成功への挑戦」への意気込み
挑戦はまだ緒に就いたばかりである。音楽関係者の多くの方々には「まさにタイムリー」「ニーズは熟してきている」と新学科の狙いに賛意を表される。アメリカのスタンフォード大学の先生達と話しても「本当に創るの？羨ましい」と

おっしゃる。だが「少子・高齢化」の波にあって、新学科を創設することの難しさや、またクラシック音楽自身のマーケットが縮小している中で学生募集にも苦労するだろう。既存の市場だけでなく「新規ビジネス」を開拓するのはベンチャー精神でもありしつかり卒業生の就職の実績をつくるのが大切と思っている。「マーケット・クリエーション(市場創出)」とか「デマンド・クリエーション(需要創出)」の面も多い。読者の皆様にも「IT」と「経営学」を「音楽」とともに学んだ学生の将来の進路やインターンシップなどに興味・関心をもって頂きコメント下されば大変有難く思います。

*最後にかえて「紹介のひとこと」
7月10日に吉本興業と本学音楽学部で「新学科誕生劇 ソーアイ カンタービレ」の公演を行った。これはコンサートがいかに創られるかを吉本新喜劇のお笑い仕立にしたもので脚本から有名タレントの皆さん迄により素晴らしい舞台となり最後に本学の教授方が演奏するという芝居で大変好評でした。新学科の認知度をあげようと考えたのだが舞台つくりではクラシックも吉本さんも変わらないことを改めて認識した。ダイジェスト版など本学科の紹介のホームページ・ブログ・ツイッ

ターなど併せてご覧下さればと思います。(http://www.soa.jp/management/index.htmlを参照ください。)



なお筆者は本年四月から既存の「音楽学科」で教授として「アトマネジメント」を担当している。生徒達自身が企画・実行した「自主公演コンサート」の終了時の写真を添付しておきます。

同窓会だより

東京支部「洛粋会」

平成22年7月16日(金) 18時から、(財)日本宇宙フォーラムの会議室をお借りして、第3回「洛

粋会」が開催されました。「洛粋会」は、洛友会東京支部の昭和40年卒から44年卒の拡大クラス会です。今回は昭和42年卒が当番学年として準備をいたしました。当日

は37名の参加者があり、第1部の演題会では「日本のITについて」と題して浜口友一氏(昭和42年卒、N T T データ株式会社取締役相談役、前社長)が情報サービス産業について広い見地、体験から分かりやすく講演されました。欧米との比較、日本の情報サービス産業の現状分析、そのあるべき姿、「かえる力」等、貴重なお話をしました。第2部の懇親会では、講演者への質問や出席者の近況などの話題で盛り上がり、時間の経過を忘れて語り合いました。最後に、次回は昭和43年卒が担当することを約して散会しました。

来山 征士(昭42年卒)記



支部だより

中国支部総会報告

平成22年5月28日(金) A N A クラウンプラザホテル広島において第57回目となる平成22年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会には本部から木村先生、教室から高橋先生をお迎えし、中国地方各地から26名の会員のご参加をいただき、盛大な総会となりました。

総会は、開会にあたり細田支部長からご挨拶をいただき、引き続き支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会計決算、予算案、支部役員改選案について説明・提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。その後、支部役員改選でご承認いただいた松井新支部長からご挨拶をいただき、新役員体制による中国支部の船出となりました。

続いて木村先生から洛友会本部の近況について、また、高橋先生から大学の近況について、それぞれお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

総会終了後、記念撮影を行い、松井新支部長のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。支

部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、細田前支部長のご発声で支部懇親会をおひらきとしました。

岩田 大司(平10年卒)記



東京支部総会報告

平成22年6月13日(日)、学士会館にて東京支部の総会、講演会及び懇親会を開催しました。梅雨入り直前の爽やかな晴天ということ



松田支部長

もあり、71名(うち支部会員68名)と例年どおりの盛会となりました。

支部総会には中原総務幹事の司会により、午後3時に松田支部長による挨拶で始まりしました。松田支部長からは、

①ここ数年の課題であった洛友会を若い人達に広めるための活動として、東京支部の若手交流会・歓迎会を4月に開催し75名もの参加があり、うち16名が新社会人であった。2次会もあり大いに盛り上がった。一方、年2回とお約束した若手中心のイベントが1回しか開催できなかった点に関して力不足を反省している。

②たまっている繰越金に関して、年間の恒常的支出額の140万円程度を繰越とするのが健全だと考えている。若手の会、趣味の会へのサポートに使用していきたい。

③洛友会が世代を超えた楽しい会となることを祈念する。との報告がありました。



長尾会長

続いて長尾会長より来賓挨拶として、

①本年度名簿を発行したが、プ

ライブショーということで抑えている方が多い。情報を開示するよう是非、協力してほしい。

② 本部総会が京都で5月に開催された。全支部代表より報告を受け、にぎやかであった。東京支部からは活性化に関する取り組みを紹介いただいた。北海道や東北支部では若年層の入会が減っており、総会に数人しか参加できない状況である。

③ 学生からも洛友会の入会金4000円を徴収している。そのサービスとして、OBの講演会などを開催しており、定着しつつある。

④ 東京に住んで3年になるが、週末には京都に帰っている。やはり京都は捨てがたい。皆さんも機会を見つけて京都によってほしい。

などのお話がありました。

続いて、中原総務幹事より平成21年度行事・活動報告「第一号議案」があり、秋の講演会では本日来賓の長尾先生を講師にお招きして95名の盛大な会になったこと、見学会では理研で説明いただいた方が京大出身者であり、特に情報基盤センター姫野センター長が東京支部会員であった等、の紹介がされました。また拡大クラス会では、新たにS45〜49年度の設立のための活動がおこなわれ、会の開催は本年度になってしまったが、無事「洛談会」として発足できた

旨報告され、承認されました。

次に鎌田会計幹事より平成21年度決算報告および監査報告「第二号議案」があり、講演会参加増が主な支出増加要因となっていること、および4月の若手交流会は会計年度上H22年度となること等の説明がありました。この決算内容に対し、塩見監事からは問題なしとの監査報告が行われ、決算報告および監査報告は無事承認となりました。



井上新支部長

引き続き平成22年度の役員／評議員／幹事「第三号議案」の提案が行われ、拍手をもって承認されました。平成22年度の新役員は、

支部長	井上英也 (S44卒)、
副支部長	塩見 正 (S45卒)、
監事	小澤秀司 (S46卒)、
総務幹事	鎌田照己 (H03卒)、
会計幹事	的場直人 (H04卒)、
庶務幹事	杉田寛之 (H04卒)

の6名となりました。

続いて退任される松田前支部長より、幹事、役員への努力へ感謝したい。今後も会員のネットワークが広がっていくことを期待したいとのご挨拶がありました。

ここで司会者が鎌田新総務幹事に交代となり、引き続き井上新支部長より若手活動、新しい活動に取り組みたい。学舎を同じくした仲間の親交を深めるということが第一の目的だと思ふのでよろしくお願ひしたいとの就任のご挨拶がありました。

その後、平成22年度行事・活動計画「第四号議案」、および平成22年度予算計画「第五号議案」が説明され、いずれも拍手をもって承認されました。最後に、平成22年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿5名、喜寿8名)への祝辞が述べられるとともに、会場より拍手を持って祝意を表しました。

以上で全ての議案が承認された後、引き続き佐藤本部幹事より、桂キャンパスや進学・就職状況、教育状況等、京大電気系教室の近況の報告がありました。昨今理科離れ、工学離れ、電気離れが深刻な状況であり、電気系学科は工学部6学科の中でも中々低の人気となっている。オープンキャンパスや、女子高生向けイベント「テク女子企画」の実施や、夏休みの課外活動「サマーキャンプ」を実施するとともに、修士+博士一貫教育による「研究」に特化したエリート教育を実施しているとの報告がありました。

以上をもって、平成22年度洛友会東京支部総会は閉会となりました。



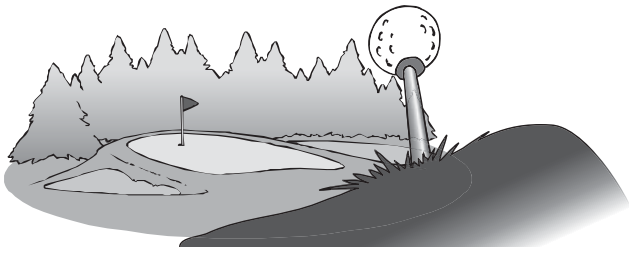
コマツ 坂根会長

引き続き、講演会が開催されました。講演会では、講師としてKOMATSU代表取締役会長坂根正弘氏をお迎えし、「『強きをみがき、弱きを改革』と題して、コマツの概要、海外売上80%以上のコマツから見た世界の動き、経営構造改革、企業価値とブランドマネージメントについてプレゼンテーションを頂きました。坂根氏はコマツが赤字の時代に社長に就任し、2001年より①経営の見える化、②成長とコストの分離、③強みを磨き、弱みを改革、④大手術は1回だけ。の4つのスローガンを掲げ改革に取り組み、コマツをV字回復に導かれました。ご講演ではコマツのみならず日本の強み弱みにまで踏み込み、ブランドマネージメントではコマツでないと困る度合いを高め、パートナーとして選ばれ続ける存在となることが重要と熱く語られ、会場を魅了しました。質疑で

は環境問題へ取り組みに対する見解を求められ、「工業生産段階のCO₂排出量はかり議論になるが、結局は製品の利用時にもCO₂を排出している。電気自動車は排出量が削減に結びつくといわれているが、発電時のCO₂排出まで考慮すると国によって大きく違い、中国ではハイブリット車よりも排出量が大きくなる。企業がビジネスに結びつく取り組みによりCO₂の削減も可能だが、京都議定書の範囲では許されていない。ライフサイクル全体を考慮して正確な分析に基づいた議論検討をすべき。」との持論を披露された。

午後5時45分より恒例の懇親会に移りました。

井上新支部長の乾杯のご発声で始まった懇親会は、S21卒からH20卒まで、幅広い年齢層にわたる多彩な参加者の交流の場となりました。料理を囲んで会員の方々の談笑が広がる中、鎌田新総務幹事を進行役として、趣味の会の各幹事から活動の紹介がされ、麻雀会中田様(S38卒)からは、平成卒の方からも参加希望があり今年度は土日開催も検討している、ゴルフ会幹事の西様(S33卒)からは第120回コンペ開催に際し記念ボールを差し上げたいことを考えている、とのお話がありました。続いて喜寿代表として近藤様(S



31卒)、最年長の武田様(S21卒)からスピーチを頂きました。そして最年少の藤本様、大石様(H20卒)からは、洛友会をしょってゆけるべく頑張りたいとの思いが語られ、大きな歓声があがりました。その後、的場新会計幹事の音頭により、恒例の「琵琶湖周航の歌」を合唱し、最後に塩見新副支部長の中締めにより午後7時15分に散会となりました。

総務幹事

鎌田 照己(平3年卒) 記



懇親会「琵琶湖周航の歌」合唱

中部支部総会報告

平成22年6月19日(土) 午前11時から、名古屋駅前の名鉄グランドホテルにおいて、平成22年度中部支部総会を開催しました。本部からは大澤靖治前副会長、教室からは高岡義寛教授にご出席いただき、支部からは28名の参加を得ての総会開催となりました。

議事は根石支部長の挨拶に始まり、その中で本部の平成22年度事業計画案と平成21年度支部会費納入状況が紹介されました。中部支部は全支部の中で会費納入率が最低となっており、役員からの納入依頼など何らかの対応が必要と痛感しました。次いで、前年度事業・決算報告、今年度事業・予算計画審議が行われ、全会一致で承認されました。

総会に引き続き、大澤前副会長から現況報告、また高岡教授から桂キャンパスと電気系組織の現況、平成21年度卒業生の進学就職状況等について説明がありました。学生会員制度の状況についても説明があり、学生に対する諸行事の中で洛友会の意義や歴史などを説明していることが紹介されました。こうした活動を継続すること、卒業後の洛友会活動参加および会費納入率向上につながるものと大いに期待しております。

この後、全員での記念写真撮影を行い、懇親会へと移行しました。酒井副支部長の乾杯発声でスタートし暫く歓談の後、今年の新人会員や初参加の会員諸氏に自己紹介・近況報告をしていただいている内に予定時間は過ぎてしまい、最後に石川進先輩のリードで「逍遙の歌」を合唱して散会となりました。

なお、今年度の中部支部活動は以下の通りです。

- ◆秋の例会…11月6日(土) 核融合科学研究所(土岐) 見学
 - ◆懇親囲碁大会…10月頃
 - ◆懇親ゴルフ会…真宝CC
- 平成23年4月2日(土)
多くの会員諸氏のご参加をお待ちしております。

総務幹事
松浦 昌則(昭53年卒) 記



第93回関西支部
ゴルフ競技会報告

△プレー状況▽

第93回関西支部ゴルフ競技会が平成22年5月15日(土) 武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。



始球式(福川氏)

当日は晴天に恵まれ、アウトは福川氏(昭和30年卒)、インは伊藤氏(昭和34年卒)の始球式でプレーを開始し、合計19名(うちシニア9名)が競技に汗を流されました。

結果は以下のとおりです。

- (シニアの部)
- 優勝 西村 登努志(S38年卒)
- 2位 平嶋 正芳(S38年卒)
- 3位 松室 憲尚(S33年卒)
- (一般の部)
- 優勝 山本 博士(S51年卒)
- 2位 神野 厚英(S51年卒)
- 3位 大澤 靖治(S44年卒)

(第85～92回の優勝カップの取り切り戦優勝者)

シニアの部

西村 登努志 (S38年卒)

一般の部

大澤 靖治 (S44年卒)



シニア優勝、取り切り戦優勝 (西村氏)



一般3位、取り切り戦優勝 (大澤氏)

△懇親会▽

ブレイ終了後、三浦氏 (S55年卒) の司会により、表彰式兼懇親会が開催されました。

表彰式では、入賞者に景品および優勝カップが手渡されたあと、入賞報告と今後の抱負を述べて頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

△お知らせ▽

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)にゴルフ競技会を開催

しております。今回は平成22年10月9日(土)を予定しております。若い方も含めて、多数の皆様のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽

関西電力株式会社

三浦 良隆 (S55年卒)

中居 賢男 (H14年卒)

連絡先

050-7104-6014 (中居)

nakaimasa@b3kepc.co.jp

教室だより

研究室対抗野球大会表彰式

28チーム(30研究室)が参加して昨年5月から行われてきた研究室対抗野球大会(幹事は前年度準優勝の小林研究室)が4月16日をもって終了し、表彰式は略式となりましたが、優勝のエネルギー科学研究所チームの代表者に、昨年洛友会より寄贈された優勝カップが授与されました。なお、準優勝は和田研究室、三位は川上研究室でした。

玉置直寛(平22年卒) 記

平成22年度懇話会開催のご案内

在校生(学生会員)と卒業生(正会員)の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、奮ってご参加下さるようご案内いたします。

記

日時:平成22年11月19日(金) 14時30分～19時30分
場所:吉田キャンパス 電気総合館大講義室
懇親会:生協吉田食堂(旧教養部)

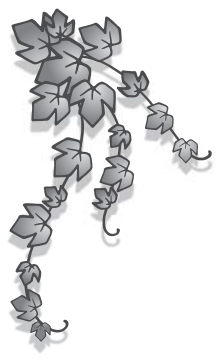
プログラム(予定)...

- 14時30分 開会挨拶 (電気電子工学科科長 北野 正雄教授)
 - 14時40分 「地球温暖化論について」 大引 得弘先生(京大名誉教授・昭38年卒)
 - 15時30分 「光デバイス研究開発の30年と今後のイノベーション」 早川 利郎氏(富士フィルム・昭51年卒)
 - 休憩
 - 16時20分 「歌声合成技術について」 *初音ミク*を支える技術 剣持 秀紀氏(ヤマハ・平3年卒)
 - 18時00分 懇親会(生協吉田食堂1F) (会費:社会人3,000円、学生無料)
- 連絡先:電気電子工学科事務室 長谷川 智子
電話:075-1753-15273
FAX:075-1753-15271
Eメール:konwakai@kueekyoto-u.ac.jp

訃報

昭24	近江 昌二	22・8・2
昭24	小原 猛	22・7・2
昭28	花木 充夫	22・8・12
昭39	徳田 剛士	22・5・16

以上の方々をご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。



編集後記

小生、ある成り行きからiPod touchを購入し、メールを設定するところまではやりましたが、その後は放置してしまい、つい最近まで部屋の片隅で眠っておいりました。それが今は毎日使われるようになったのです。今号の記事を読み、漸く私にも役に立つ使い方を知ったからです。今は、片道65分の通勤時間も長いと感じることは無くなったような気がします。洛友会会報への一般会員からの寄稿が今号から始まりました。いかがでしょうか。積み残し分は1月号に掲載の予定です。